

七人の侍

—— 映画文学人生論

監督：黒澤明 (1954年) 脚本：黒澤明 橋本忍 小国英雄
参考：橋本忍「複眼の映像」 撮影：中井朝一
出演：勘兵衛 志村喬 音楽：早坂文雄
五郎兵衛 稲葉義雄 七郎次 加藤大介
久藏 宮口精二 勝四郎 木村功
平八 千秋実 菊千代 三船俊郎

今度もまた負け戦だったな 勝ったのはあの百姓達だ

黒澤明監督の『七人の侍』は歴代の日本映画で最高の傑作という評価が定まっている。その評価に私も異存はない。映画が文学に含まれるかどうかかわからないが、もし含まれるとすれば、歴史文学の最高峰の一つにランクされると思う。

時は戦国時代末期の天正十五年、場所は日本のどこかの山村。収穫したばかりの作物を狙って野武士が出没している。村人たちは自衛のため、侍を雇って野武士に対抗し、撃退することに成功するという話である。

「今度もまた負け戦だったな。勝ったのはあの百姓たちだ」という勘兵衛（志村喬）のセリフでドラマは終わる。百姓に雇われた七人の侍のうち、の四人は戦死し、三人が生き残ったが、その三人にも勝利者の栄光はない。

七人の侍はそれぞれが個性的で、魅力的なキャラクターの人物として紹介されている。

志村喬 (勘兵衛) 上泉伊勢守がモデル

稲葉義男 (五郎兵衛) 塚原ト伝がモデル

宮口精二 (久藏) 宮本武蔵がモデル

千秋実 (平八) 明るく、人なつこい侍

加東大介 (七郎次) 勘兵衛の忠実な家臣

木村功 (勝四郎) 前髪姿の凛々しい若侍

三船敏郎 (菊千代) 豪快で野性的な百姓侍



七人の侍——映画文学人生論

上泉伊勢守、塚原卜伝、宮本武蔵は講談でおなじみの人物。この三人の剣豪のモデルが登場するだけでも興味津々だが、それに加えて、野性味あふれた百姓侍の菊千代、実力は中の下だが、周囲の雰囲気をなごませる平八、槍の遣い手で実直な七郎次、村娘に慕われる若侍の勝四郎という顔ぶれ——特に三船俊郎の演じる菊千代が面白い。

実は菊千代だけは侍の身分に疑問がある。系図を持参して、仲間に入れて貰おうとするが、その系図では、天正三年生まれとなっていて、「天正三年生まれの十二歳か」と笑われてしまう。

しかし、当時は実力のある者がのしあがることのできる下剋上の時代だ。天下をとった豊臣秀吉や徳川家康の出自も菊千代と似たようなものだ。侍、野武士、百姓という身分の違いもはっきりしたものでなかったのではないだろうか。

この時代にまでさかのぼって、自分の先祖がどのような生き方をしたかのかをあれこれと想像しなくなってくる。よくこんな面白いシナリオをつくったものだと感じる。

『七人の侍』のタネ本は『本朝武芸小伝』らしい。シナリオは黒澤明、橋本忍、小国英雄の三人による合同脚本だ。橋本忍がたたき台をつくり、黒澤が書き直し、小国が司令塔として、最終的なチェックをしたという。

早稲の香やこのたびもまた負け戦